

論文

中学校における少年院の連携事業に関する一考察

作 田 誠一郎

〔抄 録〕

本論は、少年院法の改正や収容者の減少において大きな転換期を迎えている少年院とさまざまな問題を抱えた生徒に対応する中学校の連携を通じて、その課題や展望について明らかにすることを目的としている。調査の結果から、少年院に対する周囲のイメージをどのように変えるのか、また施設数の関係から連携できる中学校が限られること。さらにオープンな情報共有の場の設置や問題を抱えた少年の数が多ければそれに対する人的な支援が困難になることなど、いくつかの課題が見出された。しかし、これまで少年院において非行少年の矯正教育に基づいた多様なアプローチや教育的技法を蓄積している法務教官が、中学校の教員や生徒と関わることで互いに多くの知見が得られ、指導面においても相乗効果をもたらすことが明らかとなった。

キーワード：中学校、少年院、少年非行、連携、矯正教育

1. 研究目的

少年院の収容者数は、戦後最も少ない値で推移している⁽¹⁾。戦前の矯正院から現在の少年院に至るまで、同院は非行や犯罪をおこなった少年に対して矯正教育を施してきた。その少年院に所属する法務教官は、各時代の非行少年と対峙し、少年の家庭環境や対人関係を把握しつつ、個別の関わりを通じて個々の非行要因を考え、再非行の防止（育て直し）に努めてきた。しかし、少年院は少年院法の改正（2015）を受けて大きくその内容が変化しつつある。例えば、同法44条において出院後に自立した生活を営む上で困難を有する在院者に対して関係機関と連携しつつ社会復帰支援を施すことが掲げられている⁽²⁾。

また中学校に目を向けると、非行少年にとって中学校も多くの時間を過ごす重要な場である。中学校においても、いじめ問題や保護者対応など、近年多くの諸問題に取り組んでいる。そのなかで、非行少年の対応もそのひとつの課題または問題として長い期間にわたって対応してき

た。しかし、これまでの非行少年とは異なり、今日の非行少年は家庭問題や経済的問題に加え ADHD（Attention Deficit Hyperactivity Disorder）等の関連も注視されている。

一方、近年の先行研究をみると更生保護施設における非行少年の課題について、仲野（2017）は、少年院と更生保護施設の移行に伴う連続性に着目し、矯正教育によって生じた少年の変容と支援のあり方について提言している。また都島（2017）は、同施設におけるスティグマと「立ち直り」に着目し、対処行動について詳細な分析をおこなっている。少年院における質的調査も広田ら（2012）によって実施され、少年院における矯正教育の効果と限界について考察している。そのなかで、知的障害や発達障害を持つ少年への対応や施設という「隔離機能」の影響と出院後の教育効果については非行少年の再犯防止や生活を含めた立ち直りに際して重要な課題を提示している。これらの先行研究は、少年院内の教育効果や出院後の更生保護施設の立ち直りを中心に考察した研究成果である。しかし、本研究で取りあげる中学校との連携事業は、これまでの非行少年の処遇に関係する機関との関わりとは一線を画す新たな繋がりと言える。

したがって、本研究は次の2点を中心に考察する。1つ目は、少年院と地元中学校の新たな連携に至るまでの経緯を聞き取り、その連携に関わる過程や課題について明らかにする。2点目は、矯正教育のエキスパートである法務教官の関わりが問題を抱えた生徒にどのような影響を与えたのかを明らかにし、今後の非行問題に対して分析することである。

これまで少年院という施設内で非行少年の育て直しに尽力してきた法務教官が、さまざまな問題を抱える少年に対して連携して支援することは、今後の少年院や非行少年の処遇においても新たな一歩を踏み出す契機であると思われる。したがって本論において、非行少年の支援とその課題について考察する。

2. 調査概要

本調査対象のA中学校は、X県Y市立の中学校であり、同市にあるB少年院とは距離的に近い位置にある。調査は、2018年12月10日午前A中学校、午後B少年院において実施した。また卒業後の少年の動向を中心に、2019年3月22日午前中学校においてインタビュー調査を実施した。調査対象者は、校長、教頭、学年主任（3年生）、担任、法務教官の5名である⁽³⁾。各対象者の略歴は表1の通りである。

表 1 調査対象者

	性別	同校・同施設勤続年数	備考
校長	男性	5年	
教頭	女性	15年・教頭3年目	
学年主任	男性	7年目	小学校教員を経験
担任	女性	6年目	特別支援学級
法務教官	男性	12年目	

A 中学校は、全校生徒は約 400 名であり、教員数は 38 名である。3 年生は、約 140 名（4 クラス）である。調査時で 3 年生である男子生徒は、特別支援学級に所属している。

1) A 中学校の現状

A 中学校は、昭和 30 年代に 2 つの中学校が合併する形で創立された。その後、校内暴力等の学校問題を経て現在に至る。5 年未満の 20 代の教員が 10 名であり、30 代の教員は少なく、40 から 50 代が多いという構成になっている⁽⁴⁾。少年の所属する 3 年生は、50 代 1 名、40 代 1 名、30 代 2 名の計 4 クラスの担任がいる。少年は特別支援学級に在籍しているが、通常学級にも参加している。

調査者：荒れていた時期はどれくらい前になりますか。

教頭：私が来て 15 年になるんですけども、その時はまだ走り回ってました。えー授業中も。はい。

調査者：その時、ここは大変な状況だったということですか。

教頭：大変でした、はい。先生方も、ここに赴任するときは（笑）、ぶっちゃけね。気合いを入れて来なければいけないような学校でした。でもその当時の、今の校長の前の前の校長が、新しく掃除を取り組んだりとか公文を取り組んだりとか、何かこう褒める教育っていうのをはじめまして、10 年くらいかけて。その取り組みで成功して今になっているということですね。

担任：もう、来る人来る人やっぱり覚悟を決めて来ましたっていうような（笑）。でも入ったら、だいたい落ち着いている。あの過去のようなことはないの、んー、なんか普通じゃないっていうような印象はみんな持つと思いますけど、うん。

校長：うちの学校、今から 12 年前ですかね。12 年前に教頭できた時は、もう開校以来やっぱ荒れてましたね。困難校で有名でしたから。（略）当時、タバコはそこらへんで、10 人や 11 人や。毎朝僕タバコ拾って、カンカン一杯くらい。（略）こっち網にしとるんはね。登るんですよ。出るんです。飛び降りる可能性があるでしょ、もう下

から登ってくるんです、うちの学校は。綺麗になつとんが、今では当たり前ですけど、めちゃくちゃ思うんです。その前、毎日ね、ガラスが10枚20枚、毎日割れよつたんですよ。今では、何枚割れた？よっぽどでなかったら割れてない、うん。年間1枚割れるか割れへんか。信じれんでしょ。

当時のA中学校は、暴力等の学校問題を多く抱える状況にあったことがわかる。しかし、さまざまな取り組みの結果、現在は落ち着きを取り戻しているようである。近年の生徒たちの様子については、次のように語っている。

調査者：今のやんちゃな生徒たちは、グループなんか作ってやってる感じですか。

教頭：全然そんなではなくてピン、ピンですね。それぞれ、勉強嫌いな子たちが勉強嫌いやけん。やんちゃいうてもそこまでのやんちゃでもないし、うん。学校来とつたら教室入って、座って何か本読みよとか、寝よとか、静かなやんちゃです。

調査者：それは最近の傾向ですか。

教頭：最近の傾向やね、うん。周りに迷惑をかけたらいかんていうのは何かわかっているような。外ではね、いろいろしよりますけどね。学校のなかで、授業をしよるみんなに邪魔してはいけないっていうのはなんかわかっるとし、自分も高校行こうと思ってますから。うん、そうそう、高校。

調査者：進学意志が。

教頭：最低限度のラインは超えないようにしようっていうのはありますね。

調査者：なかには中卒でいいやって言う子はあまりいないですか。

教頭：うん、やっぱり行きたいです。行きたいって言いますね。

以前にみられた集団での非行行為とは異なり、単独での行動が中心であり、注目する点として進学意欲が校内の非行行為を抑止していることがあげられる。この進学に対する意識の変化について校長は以下のように述べている⁽⁵⁾。

校長：自分の子どもやなんかでも、ここで育ててもろて、まあ大学まで行つとるから、地域のためにやったらええし。(略)毎日子どもがなんかしとっても、とにかくうちの地域をよくするためには、まず高校へ入れること。高校へ入れて、正の循環になれば、勉強して頑張ろうと思うようになる。高校行けんかったんですよ、うちの学校はやっぱり。だから、僕が職員に言うてるのは、高校行ったら昔はあかんかったけど、校長さんや先生の言うこと聞いとつたら高校入れるんやなって思ったら、勉強したりなんやするじゃないですか。なんぼ色んな生活があつたって。負の循環になつとつたんで

すよ。それを正の循環に変えることだけ職員に言うて。正の循環に入ったから、後はもう、僕がどうせい言うのじゃなくて、目標決めて、職員がもうケース会議やらも楽しんでやっとなんで。

これまで子どもの進学に対してあまり関心を示さなかった保護者とその保護者のもとで中学時代を過ごす生徒たちは、高校進学という共通の目標をもつことで学校生活の言動に変化がみられたようである。この進学意欲の向上に際しては、保護者や地域社会、生徒自身の理解を得るために十数年の多くの時間を要したが、現在は高校進学という形で実を結びつつある。しかし、同校はこれまでと異なった生徒の問題に直面している。

教頭：難しい、難しいの質が変わってきています。うん。やけど昔はその、本当にこう暴力的であったりとか、授業を妨害するとか、物壊すとか、そういういわゆる非行。今は、いわゆる発達障害系で、コミュニケーションが取れずに不登校になったりとか、うん。で、特別な支援を必要とする今ね、担当をなさってくださっている特別支援の数、生徒さんも増えてきているとか。そちらで一人ひとりにこう手が。大勢でがーんと爆発していくじゃなくて、この子はこう、この子はこうっていう感じで、うん。

先にも言及したが、以前の集団的な非行行為とは異なり、このコミュニケーションに関する児童生徒の問題は多くの学校でも注視されている事象であろう。そのために、教員間の情報交換や協力はこれまで以上に重視され、よりきめ細かい個別指導が求められることになる。そのような状況のもとでA中学校の教員の構成をみると、20代の若い教員も多く勤務しており、若い教員の指導についても次のような状況が起こっている。

教頭：私は結構自信を持っている先生が増えてきているなって若い先生のなかに。だから、まあアドバイスとかしても、あまり素直に聞き入れない方が増えてきたんじゃないかな？ま、人によってももちろん違いますからあれなので、うん。なので、ちょっとそういうを感じることは、あります。(略)自分のなかでこうしたいというような思いはあって、もちろんね大学とかでも勉強されてるからね。あるんだろうけれども、やっぱりね、大学で学ぶことって本当にこうしていくのとは違うし、私も色々こう学校が変わっていけば、やっぱ地域ごとにも、こう雰囲気的なものも違ってたりもするから、そういうところで合う合わないも出てきたりとかもあるし。(略) そんな最初から上手くいくわけはないんだけど、結構そういうのを言いたがらない。もっと早めに言うてくれたらなんとかなったのについていう、もうちょっとどうしようもなくなってからこう、「あらっ」ていう。

担任：叱り、うん、どうなっても、あの、私たちなんてもうばあーって行くじゃないですか（笑）、そうやけど、どう叱っていいか、ちょっとどない言うたらいいんですかみたいな、生徒指導のとこ。

調査者：叱り方というと。

担任：うん叱り方わからないっていうのは私、何回か聞かれたことがありますね。それはやっぱり若い先生が、ひとつ悩んでいるというか、うーん。いやなかなかちょっと手のかかる子に対してやっぱりわからない感じなんですかね。うんうん。

調査者：コミュニケーション能力の高い先生も当然いらっしゃると思いますけど。

担任：うんうん、おります。逆の先生もおります、はい（笑）。こう、生徒に話しかけられない。横におるんだけど、どう話してよいかわからない。「大丈夫？」って思うけど、うーん。

調査者：それは先生方にも悩みとして言いませんか。

担任：言わないですね。言わないですね、うん。

本論に直接関係する内容として、問題行動を起こす生徒の指導があげられる。新任教員のなかには、生徒とのコミュニケーションや指導に際して悩む姿がみてとれる。しかも、その悩みを先輩であるベテラン教員に打ち明けることができないことも特記すべき事象と言える。

2) 少年について

少年は、小学校で特別支援学級に在籍しており、自己表現の困難な状況で暴力的な言動をとるようになった。調査時点では特別支援学級に在籍し、交流及び共同学習として通常学級に参加している。また少年は、大柄の男子少年であり、暴れるとなかなか制止できない場面も多々ある。

担任：周りのこともすごく気にするし、うまく自分を表現できない、それから自分が「やる」言っているけどすぐに集中が途切れて、そんな時に思うようにいかんかったら手が出たりとか暴れたりとかをする。で、まあ2年生の時にクラスの方が結構、彼に対しても言ってる事は別に間違ってもないんだけど、できないことに対してきつく、やっぱり言ってしまったりする女の子がいて。1年生の時はまだ小学校から上がってきたばかりだったので彼の様子とか、彼はこういう子なんでみんなもあの気をつけてあげて下さいってこういうことも起こりますというのは、親御さんの承諾のもとでクラスの方でだけはお話をしていたんです⁽⁶⁾。で、2年生になったときにはもう別段そういうこともせずにはいたんですが。だから新しくクラスになった子だから、あのまあ変わった子という認識のもとでちょっかい出すんじゃないけど、「そんな何でするん」いう

ふうに、つつい言ってしまう。その女の子の方もちょっと幼い感じの子ではあるんですが、気になってしょうがないし、ちゃんとできないところとかが。で、そういうのに対して「なんでゆうん」とか言うて、ちょっと暴れて「あいつはきもい」とかそういうやっぱ口も悪かったりする。だから、そういうのでちょっと暴れてしまったことがあって、で、まあそういうのがちょっと続いて。(略) 結局注意されたことが、自分も反省はしないけど、うまく伝わらないのと、えーと、相手が女の子だって。そしてこう女の子のほうも感情的に、キンキン言う。で、彼もギャング言。ま、似たようなタイプっちゃタイプなんですけど。で、そこでまた私が間に入ったんやけど、こう「うっさいんじゃ」ってこう突き飛ばす、で、まあ対教師暴力という形のあるようになったんですけども。彼はカーってなってるところの状態だったので、それまで大きく暴れて、私に手を出すというのはなくて、そこではあったみたい。それ以外、男の先生には結構ね、まあ物に当たったりして、止められて、バーって暴れることがあったんやけど。ま、そういうところで。はい、そういうことがあった。

少年への配慮については、さまざまな条件や対人関係のなかで判断することになる。1年生である程度周囲と関わりをもっていた少年だが、2年生では対人トラブルのなかで暴力的な行動を起こすことになった。この状況で少年の様子は次の通りである。

担任：一応話、1対1で話をするときには、もう本人すごく反省をしているんだけど、全く残らないんです。だから同じことを毎回毎回繰り返す。ただ彼も、その、やんちゃ系にはすごく興味があって、そのちょっと、あの髪型の変った子とかいうのは、すぐめざとく見つけるし(笑)、「授業しよらん、あいつはどうなんやろう」とか、「夜遊びしよんちゃうん」とかね、そういうのはすごく興味があって。

調査者：少年は、行動が目立っちゃうんですかね。

担任：まあ目立ちますね、人の目が気になるから。こう遅れたら入らんかったりとかするので、「何しよんのあいつ」っていう、入らへんのにって。

調査者：ずっとじゃあ教室の前の方でなんかこう入らない。

担任：あの、入るタイミングを逃すと、自分で逃しときながらみんなが見るって、それは後から入ったらみんな見るやろって、みんなが見るけん入れんっていうのが。

調査者：一斉に見られるっていうのが。

担任：紛れて入ったらあれやねんけど、あと一緒に入ってあげたりなんかすると入るんですけど、ただ今もう3年生なんで、受験のほうにみんなが集中になってきたので、教室の雰囲気は今までと変わっているのはどうも肌で感じているらしく。そのもうシンとなってしまいうので余計に入れんっていうのが、彼のなかにはすごくあるみたいで。

少年はクラスメイトの視線に対して敏感になっていることがわかる。また先述したとおり、進学に対する学校全体の取り組みにおいて3学年になったクラスが受験に向かう雰囲気となっており、ますます少年にとってコミュニケーションを取りづらい状況になったことがわかる。

3) 少年院との連携の経緯

少年院との連携においては、前述したとおり学校が置かれた状況が大きく影響している。生徒や保護者、地域との関わりがなかで進学することの意味を周知することは、荒れた学校を再生するひとつの方策であった。そのなかで、他機関や専門職との連携が進学意欲の向上と同時に進められる。同校の専門職の協力としては、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーがあげられる。調査時点でA中学校のスクールカウンセラーは受け入れから10年目を迎え、週2回のペースで来校している。スクールソーシャルワーカーは、市から派遣されており、小中学校を対象に巡回していることから、A中学校を担当しているスクールソーシャルワーカーは小学校時代の少年とも面識がある。

教頭：そうですね、もう家庭訪問から児相（児童相談所）、全部一緒に行って下さるので、福祉関係とかも子ども課とか社会福祉の方も今関わってもらっているし、貧困で生活保護ちょっと拒んでいたお母さんに、何回も家庭訪問していただいて生活保護を受けられるようになったという家庭もありますし、そういうのは全てワーカーさんにしてもらってます。

また支援員との協力関係も結ばれている。基本的にA中学校を含めるY市では、小学校を中心に支援員が配置されているが、中学校の全てがカバーされているわけではない。A中学校では、1週間（14時半まで）の勤務が1名、週2、3回の勤務が2名である。また大学院生が週2回、支援員としてクラスに入っている状況であり、調査時は4名すべてが女性の支援員であった。この支援員の協力体制とともに問題となった少年に対して、訓告または市からの出席停止等の方法で混乱していた学校の立て直しをおこなうことになる。

校長：出席停止は家に居らせる形ばかり取っとるじゃないですか他所は⁽⁷⁾。そらちょっとおかしいんじゃないかなと。やっぱり戻って来たってまた同じことするから、それやったらまた別の所できちっとした教育を受けさせなあかん言うんで、警察の少年課の人や（地元の）寺さん、もう色んな人に頼んで、それで学習カリキュラムを作ったんです。その時に、少年院に行って、学習カリキュラムに入っていたいたんが始まりです。当時の所長（院長）さんが、それ聞いて、そらええことや言うて。「うちから出すわ」って言うてくれて。それが始まりです。

調査者：警察も含めて声がけして

校長：そうです、心理士さんとか、カウンセラーとか色んな方が入って。だから出席停止した時に、私が時間割を作りに行くんです。未だに。校長なっても未だに色んな人の伝手を借りて。ほんとでその時に、結局、あの子が1年生で入ってきた時に、これはいかん言うて法務教官でもいいから支援員でお願いできひんかって頼んだのが始まりで。

問題を起こした少年に対して A 中学校では、ケース会議を定期的に開催している。このケース会議には、教員だけではなく他機関の専門職も参加して多角的に総合的な意見交換がおこなわれているようである。

教頭：うん、ケース会はもう必ず。週に1回ケース会っていうのをしよんです。で、そこにわーっといろんな子があがってきて、これは特にちょっとこう、深くやらないかんて言う子は特別ケース会っていうのをまた臨時でやって。で、そこに来てもらったりとか、ソーシャルワーカーさん来てもらったりとか、なかには児相(児童相談所)の方に来てもらったりして特別ケース会っていうのも立ち上げるときがあります。

調査者：そこも校長先生含めて全員結構先生方が関わられていますか。

教頭：校長は基本入りません。私と、それに関わっている学年主任とか担任とか養護教諭とかその子に関わっているメンバーが集まって、ほんとでそれ以外にちょっと社会福祉課を呼ぼうとか、子ども課を呼ぼうとか、そういうので依頼して助言とか指導とかいただいてっていうのはしています⁽⁸⁾。

このように児童相談所や市役所等の他機関との連携は、多くの学校でも試みられている取り組みと思われる。しかし、A 中学校にとって少年院は、連携先として新たな施設といえる。特に犯罪や非行の進んだ少年が収容される少年院との連携に関して周囲の反応はどのようなものであるのか。その点については、次の通りである。

調査者：先生方、PTA それから評議員の方の反応はどうでしょうか。

教頭：評議員(他の近隣中学校)さんも、いわゆる経営会議なんかでいう、そんなん多分説明されてるかなと思うんです、こちらの評議員さんに。けどそんなに、少なくとも「えっ」というあれは。ないですね。来年度からコミュニティースクールに変わりますので、外から入るっていうのは、もう意識としてはありますから。そういう土壤がある、みなさん意識の土壤があるということですね。うん。やっぱワーカーさ

んとカウンセラーは根付いていますし。やからそのバリエーションが増えたというぐらい色々な受け止め方がね、何でそんな少年院とかって連れてくるんやっていうのは少なくとも。

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの導入など、学校社会においてこれまでの閉鎖的な空間とは異なる「開かれた学校」の姿勢が少年院との連携においても影響しているようである。また、学校経営の責任者である校長も中学校と少年院の連携について次のようにコメントしている。

校長：みなさんね、法務教官やから何とかって言うのやなくて、あの法務教官を入れよる時に、周りの人たちが結局1番心配するんは、「あー、そんなとこ入れるんやろ」とか、そう言う目で見える訳で。(略)ただ、法務教官であって、そこで専門的な知識を勉強して、そういう人から子どもたちに、効く治療の方法を教えてもらう、教えてもらえるから来てもらってるのであって。だから、その発想なんですよ。

少年院に対する社会のイメージは、校長のコメントからも読み取れる。しかし、長年にわたって非行少年に関わり矯正教育を施してきた法務教官のスキルに対して、新たな生徒への支援の方法を模索していることがわかる。

4) 法務教官との関わり

最後に法務教官と少年の関わりを中心にみていきたい。法務教官は、法務省に所属する国家公務員であり、少年院や少年鑑別所等の矯正施設に勤務している。

法務教官：僕も外出て思う事はやっぱり、ウチ（少年院）くる未満の子をみる訳じゃないですか。その未満の子が、実態としてどういうことをやってるのかっていう一部をみることができるっていう勉強になるわけですよ。でももちろん来ないですけど、そのまま来ないかもしれないですけど、でもそういうなかからまた来るんだっていう。やっぱり僕らは、鑑別所で4週間いて来た子をみる訳ですから。もうちょっとこう、生に近い感じの、まあそれは少年院って言ってるから少しは違うのかもしれないですけど。ただやっぱり学校の先生とも色んな話をしたりすると、より実態っていうか。そういうのがわかる。

法務教官にとって少年鑑別所または少年院に入所・入院してくる少年については、学校や家庭等の生活を経ているものの、これらの情報は文書としての引き継ぎが中心となる。法務教官

にとっても、施設外に出て問題を抱える少年や対応する学校の状況を知ることは、新たな知見を得る契機となっていることがわかる。次に中学校と法務教官の初めての連携についてみたい⁽⁹⁾。

法務教官：最初の出席停止の件に関しては、僕は学校には行かなかったんですよ。ていうのは、あの、「こちらへ来させます」って言われたんですよ。最初にね。生徒を。で、僕がそれは「生徒さん可哀そうですよ」と。僕が1人で会うの嫌やったんですよ。だから、学校の先生も一緒に来てもらって、それで面接をしましょうということで、教育委員会にある会議室に。だから彼と担任、担任の先生とは別々、彼は自転車であつたんですけど、「来るかな？」って言ってたら来たんですよ。で、まあそれで話をして、「なんで出席停止になったのか」とか、「今まで彼がどんなだったか」とか、たぶん水曜日だったので、もう月曜日と火曜日のやつは、一応そのカリキュラムは消化していたんですよ。で、あと残り、僕のがあってあと2日ぐらいあるって言ったんで。僕の印象で言う素直やなっていう感じですよ。出席停止になったってですよ。自転車でちゃんと指定された時間に来るんだから(笑)。これ、あの、非行少年って考えられん。自由やと絶対来ないですから。これを僕が正直に学校の先生言ったら「ちゃんと来ただけで僕はすごいと思います」って「来ないですよ、そんな」って。話もちゃんと聞いてくれましたし。でもまあ、出席停止になったのは、まあそういう色んないきさつがあつたんだろうから、「今後どうするの」って言ったら、一応「ちゃんと学校に行きます」っていうことは言ってくれたっていう感じですかね、その時の話は。

この最初の連携における出会いの場面では、少年院の面接を避けて担任と少年の両者に話を聞くように法務教官は努めている。やはり少年の気持ちを配慮して少年院での面接は避け、あらかじめ少年の情報を得るために担任から情報を収集したうえで少年との個別面接に臨んでいることがわかる。

法務教官：去年ですかね。彼が2年生の時に結構暴れたりとかするっていうのが最初。まあ、今日校長先生も言っていましたけど、キレたらっていうのがあって。それで、学校だけではなく家でも色々暴れて大変だっていうことで。それでまあ、最初はおそらく支援員を付けて欲しいって話で、少年院のOBとかでいいかっていうのが初めて。一応はその最初OBがちよつと行ってたんですけど、プラスちよつと来てくれっていうことで。それが僕の先輩だったので、さっきのその支援員の方が。で、支援員の方からも直接僕に電話かかってきて「何とかならんか」っていう話

になったので。だからそういう形もあって、院長とそういう話をしていたので、だから誰を行かすかっていう部分と、まあそっちの別の人間関係と合わせて結局僕が行くことになったっていう感じですかね。

調査者：関わって少年に変化はありましたか。

法務教官：んー、やっぱり成長したというか、だろうと思いますね、僕らも1週間に1回しか行っていないですけど、彼が成長したなと思うのは、あの少し暴れる頻度は減ったっていうのは聞いてます。まあそれでもやっぱり、トラブルがあったりするみたいですけど、基本的にはすごく落ち着いていて。ちょっと、あの発達障害があるので、話が飛んだり自分が好きなことばかり言ったりはするんですが、概ね一応、指示に従う。まあ、やる気ないとか色々言うんですけど、それなりにはこう話を聞いてくれるし。何より、靴箱で待ってくれるようになったのが3年生の夏休み過ぎてからですから。

調査者：そのきっかけは何ですかね。

法務教官：や、きっかけはわからない（笑）。最初のうちは教室に先生が呼びに行ったりとか、「あっちの教室のほうに行ってください」みたいな感じとか、しばらく待ってたら出て来るみたいなことがあったんですけど、最近はどう絶対靴箱のところで待ってます。

少年の出席停止や粗暴な言動、法務教官 OB との人間関係など、いくつかの条件によって法務教官は、中学校と関わるようになった。その関わりの中なかで、少年が法務教官の来校時間に出迎えるなど、その関わりを楽しみにしていることがわかる。次に少年との具体的な関わりの内容についてみてみたい。

調査者：話の内容については。

法務教官：その関わりとしてはだから、もう向こうが、なんか、今日、朝悪いことしたとか、昨日悪いことしたとか、まず最初に言ってくれたんで、「何した」とかって言ったら、もう「喧嘩した」だの「先生に暴言吐いた」だのね、そういう話をしてくれます。

調査者：自分でも悪いことをしたという自覚はあるんですね。

法務教官：そうそう。で、一応それを言いたいんでしょうね。彼としては言いたい。僕は別にそこはジャッジしないけどね。でも「それはまずい、まずいと思ってる」で言ったら「まずい、悪かったと思う」みたいなことを。で、「それはいかんなあ」みたいな感じで僕は言う。悪かったと思っているうえで言ってくれてるんで。学校的には、たとえば許しがたいことってたぶんあるだろうと思うんです。ただ僕は

別に学校の者じゃないので、話を聞いてジャッジはせずに「あー、でもそれはいかんのじゃない？や、どう思っとん？」みたいな感じで聞くと「あー、いかんわなあ」とかって。

調査者：少年院であれば法務教官だと少年の全て把握したうえで関われるじゃないですか。

法務教官：あ、だからそれは怖いですよ。あの親のこともわからないし。ケース会議、あの出してはくれているいろいろ細かいことを聞きますけど、やっぱり毎日みてるわけではないので。最初のうちはどういう反応するかなってというのはわかりませんでした。

調査者：時間も短いですよ、1 時間でいう。

法務教官：実際は 1 時間じゃないですよ。あの一、最後の授業に入れるんですけど。授業の終わった後、帰りの会に彼を出さないんですよ。だから帰りの会まで僕はいて、だから 1 時間半位です。

調査者：その間はずっと一緒に。

法務教官：一緒にいます。その間に嫌なこと、すごく嫌だと言ったりする、嫌だとは言うんですよ、色々やると。ただ本当に嫌だと言って何もしないことはない。時々何か、こう椅子に座って、「もうええわ」みたいなことを言ったり。また最近は、2 人立って手押し相撲。押し相撲。あれをずっとやって。で、体大きいんですよ 100 キロ位あって。だから暴れたら、彼ちょっと大変なんですよ。思いっきりバーンと押してくるんで。だからそれをやると、こうスッカリするというか。「もう一回、もう一回」とかって。でちょっと本気出したりすると、「え、もうちょっと軽くやってください」とかって言って、ほんで軽くやると「やっぱり思いっきりやって」とかって（笑）。そんな感じですよ、何か。勝ちたいけど、手を抜かれて勝っても嫌っていう。

この少年とのやり取りからもわかるように、法務教官としては通常の少年院内の生活全般を網羅している寮生活での情報量と関わりの違いをどのように埋めるのかが重要になっている。他愛のないやり取りのなかで、学校の教員とは別の立場から関わりを持っていることがわかる。次の法務教官のコメントからそのポイントを窺い知ることができる。

法務教官：少年院の子と共通するのは、やっぱり話を聞くと言う技術が 1 番はいるかなって思いますね。それと周りを把握するっていう技術はいると思います。その本人の事象にとらわれずに、事象と背景とこう、ちゃんと理解するっていうことは大事なかなと思いました。

調査者：少年院だと 24 時間ですよ。

法務教官：そう、2、3ヶ月するとわかってくるんで。それはなかなか難しいところ。まあ学校の先生とか、終わった後、担任の先生とカンファレンスとかをして帰るので、だからそこでも情報交換して。そこでは大抵すぐは帰らないので、10分とか15分、長かったら30分くらい話をして帰る。

話を聞く技術に関しては、中学校の教員にも共通して必要な技術である。特に犯罪等をおこない周囲からのマイナスのレッテルを貼られ、大人に対して心を閉ざした少年と関わりを持つことは、本人の情報収集を含めて技術的にも難しいことが予想される。法務教官の関わりの技術が本事例の少年にとってもその言動に効果があったようである。少年の卒業後の進路とその様子については、後日の調査（2019.3.21）をみると高校への進学や落ち着いた状況が読みとれる。

担任：それこそ2年の時に、1つ大きな事件があってから、先生、B少年院さんと繋がって来ていただいてB少年院での様子であるとかそういうこと色々、私たちが知らないようなことを教えていただいたり、そういうのは彼にもすごく刺激になったし。こういうことしたらいかんとかいうのを、色んな人から聞いたというのもあって。最後、それこそ特別支援学校、彼も体験行って気にいってもくれたし、高校に行って勉強もするんだけど、どちらかという作業的なことだったりとか、そういったことを集団のなかでじっくり、何種類かあるんですけど、そういうのを全部経験させてくれて。彼に合う適性にあった就職先をお世話してくれてという所まであるので、そちらの方にいうことで。あと問題行動の方も、本当に3年生になって去年は何だったんだろういう位に本人も落ち着いたし。あとやっぱりこう、聞いていただいて、いろんなお話、性教育もしていただいて。彼の場合、体も大きいし、小学生から見たらこんなに映るよとか、そんなに君の思いと違うようになったりすることもあるから、気をつけなきゃねっていうのを、やっぱりそういうふうだね、別の所から言われるのも、すごく良かったみたいで。本当に落ち着いて。（略）本当に迷惑かけることもなく、うん、怒らないかんという事もなく、終わったんです。

調査者：プラスのところが出てきて落ち着いたという。

担任：そうだと思います。はい。本当にこの3ヶ月、遅刻も減ったし。

法務教官：これはもう、思ったのは関係性を食いつぶすちゅう話をケース会議でしまして。だからみんなで分担してみんなで支え合わないとか誰かが疲弊しますよっていう話を。それは少年院で問題児がいた時は同じようにする言うのを僕はしました。1人だけがいる事案だと絶対しんどい。

調査者：先生のなかではしなきゃっていう思いが。

担任：しなきゃっていうか、とにかく今も私が1番彼の担任なので。でも私がいなくても他の先生も同じようにみてくれるということもあるし。他の先生も結構気を配ってくださったりとか。彼自身の人懐っこさもあって、その悪いことをしなかったら結構みんなに愛されキャラというかね（笑）。そういうのもあって。校長先生だろうが教頭先生だろうが、全然生徒指導のどんな強そうな先生だろうがお構いなしに、先生って言って寄って行ってあれするので。

少年に関しては、高校への進学が決まり新たな一步を踏み出していくことがわかった。これまで粗暴な行為が続き出席停止となったが、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、市役所や児童相談所、法務教官等の専門家を交えたケース会議を経て、中学校における法務教官の関わりが実現し、落ち着きを取り戻したことがわかる。さまざまな他機関連携に少年院が参加することで、中学校の教員と少年院の法務教官の双方がお互いの情報や指導方法を知ることで非行少年への指導に関する知見を相互に高めていることは、今後の少年院や法務教官のあり方にも一石を投じる試みと思われる。

3. 今後の課題

これまで、中学校の教員と少年院の法務教官のインタビューを中心に連携に至る経緯と少年の変化ならびに法務教官の関わりをみてきた。ここで総括とともに課題について考察する。

本論で取りあげた少年は、コミュニケーションや感情のコントロールが苦手であり、感情の高まりによって暴力的な言動を繰り返しおこなうことで出席停止となった。しかし、校長の学校経営の方針と教員の教育姿勢が少年のケース会議へと帰結する。このケース会議は、校長の意向もあり、さまざまな機関に所属する専門家を交えることで少年の理解に対する多角的な視点と複眼的な支援のあり方を模索する内容となった。このケース会議に専門家として法務教官が参加し、実際に法務教官が少年に関わることで中学校と少年院の連携事業が始動した。さまざまな支援の結果、少年の粗暴な言動は静まり、高校への進学へとつながった。しかし、本事例のなかでいくつかの課題も浮かび上がった。

1点目は、少年院に対する周囲の理解である。本事例においては、率先しておこなわれた連携事業のもとで、少年院も市役所や児童相談所等の機関と同様に参加しやすい環境が整っていた。しかし、校長のコメントにあったように少年院のイメージは、犯罪に至った少年が収容されるというイメージを拭いきれない。しかし、少年院に入院してくる少年は、中等教育機関に所属している、または所属していた少年が多くを占めている。法務教官が連携を通じて学校経営に参画することで、児童生徒や保護者にとって近い存在となれば、これまでの少年院や法務

教官のイメージを変える契機となるかもしれない。

2点目は、少年院と学校の連携には、その連携できる範囲に限界がある。現在、少年院は全国に49施設（分院含む）ある⁽¹⁰⁾。各施設に法務教官が勤務しているが、少年鑑別所を含めてその数は3000人を下回る程である。少年院や鑑別所の業務をしながら、学校との連携を進めていくためには、人員配置の問題や周囲の理解も必要となる。現実問題として養成する学校と施設の所在地が離れるほど、連携は物理的に難しくなると思われる。そのためには、少年院における教員研修もそのひとつにあげられる。事例にも新任教員の教育、特に生徒指導の対応が問題となっていた。職場の上下関係を抜きにした法務教官との交流を通じて、問題を生じさせる少年へのアプローチや配慮を知る機会となるのではないか。

3点目は、ケース会議等において他の専門職との交流や意見交換ができる場が必要であることがあげられる。本事例では、ケース会議が他の専門職や児童相談所等の外部組織を含めた構成であった点で、多角的な視点から意見交換がおこなわれ、組織として非行少年の支援にあたっていた。また非行少年に対する専門的な知識やアプローチの技術を有する法務教官であっても、他の専門職が少年とどのような関わりをもっているのか、どのような変化が起こっているのか等の詳細な情報の共有は、少年と接するうえで重要である。この点から情報を共有する場は必要であろう。また様々な問題を抱えた少年に対して教員だけではなく、他機関との連携を通じてグループで少年の支援を進めていくことが、少年の支援に有効であるばかりではなく、担当教員の孤立や疲弊を回避することにつながるものと考えられる。このような門戸を開いたグループで対応する情報共有の場を学校が設置できるのが3点目の課題と言える。

最後に、本事例の少年は、情緒的な面で特別な支援が必要であった。少人数の学級で通常学級よりは手厚く教育または指導される環境にあったと言える。しかし、通常の学級では、数十人単位のクラス編成のなかで、問題を抱えた少年が多ければ教員の手厚い教育や指導は物理的にも人的にも難しくなると思われる。そのようなケースの場合、法務教官がどのような関わりを持ち、支援の側面でどのように協力できるのかは、今後の相補的な教員と法務教官との関係性の構築やさらなる他機関との連携が求められることになる。この点についても、事例を調査、検討する必要がある。

4. まとめ

少年院は、少年院法の改正や収容者数の減少により大きな転換期を迎えている。しかし、戦前から少年非行と向き合い、非行少年との関わりのなかで育て直しや立ち直りにおける多くの知見を有している法務教官は、少年院内だけではなくその指導の技術や視点を施設外に広めていく時期に差し掛かっていると言える。少年非行は、非行内容や少年自身の家庭環境などをみると社会の縮図として捉えることができる。親からの虐待経験や困窮した生活環境、そして十

分な教育機会を得られない状況は、現在の学校社会と直結する課題を共有している。法務教官の専門的な技能は、今後の学校問題の解決や新たな取り組みにおいても大きな力を発揮するものと思われる。また学校現場は、いかに今ある人的資源を活用していくのか、そして、教員以外の第三者としての専門家がどのように学校へ参画していくのかを再考し、さまざまな学校問題に取り組むことが今後の課題と言える。

〔注〕

- (1) 「犯罪白書(平成30年度版)」によれば、少年院入院者の人員は、29年に2,147人で戦後最も少ない値で減少傾向にある。少年による刑法犯、危険運転致死傷および過失運転致死傷等の検挙人員(触法少年の補導人員を含む)も同様に50,209人で戦後最小の値である。
- (2) 少年法第44条には、「少年院の長は、在院者の円滑な社会復帰を図るため、出院後に自立した生活を営む上での困難を有する在院者に対しては、その意向を尊重しつつ、次に掲げる支援を行うものとする。一、適切な住居その他の宿泊場所を得ること及び該当宿泊場所に帰住することを助けること。二、医療及び療養を受けることを助けること。三、修学又は就業を助けること。四、前三号に掲げるもののほか、在院者が健全な社会生活を営むために援助を行うこと。2.前項の支援は、その効果的な実施を図るため必要な限度において、少年院の外の適当な場所で行うことができる。3.少年院の長は、第一項の支援を行うに当たっては、保護観察所の長と連携を図るように努めなければならない」と定められている。
- (3) 校長と法務教官はそれぞれ別に聞き取りをおこない、教頭・学年主任・担任は同席にて聞き取りをおこなった。
- (4) 新任教員との関わりについては、A中学校でも変化しているようである。新任教員が自らベテラン教員と関わりや指導を受けるというよりも、ベテラン教員が気遣って指導を受けやすい環境を整備していることがわかる。

調査者：先生の指導もなかなか今から大変になってくるわけですね。

教頭：校内の若年研修っていうので毎月定期的に放課後とって、いろんな生徒指導とか特別支援教育とか、授業とかそういう若年研修をやっています。

調査者：それはどれぐらいの期間ですか。

教頭：1年間、毎月、やります。で、研究授業もさせます。

調査者：若い先生との交流は研修以外ではなかなか難しいですか。

学年主任：うん、もう普段空き時間とか、放課後部活が終わってからの時間とか、そういう日常の隙間時間にするっていう形ですかね。飲み会みたいなものそんなのやっぱりないですよ。このご時世なんでしょうかね。

教頭：なので主任がね、ちょっと困っている様子をみかけたら、声を掛けたりとか、あんま向こうからはね、なかなか。言ってくるような人もおりますけど、いろんなタイプの人があるじゃないですか。やから、もう気がついたら管理職とか主任とかが「どんなん？」っていう感じで話しかけて引き出して聞いてあげるっていうような。

調査者：気遣ってあげないといけないんですね

学年主任：そうですね。もう、いっぱいいっぱいになってますからね。そこらへんは上のものが気をつけて、コミュニケーションを仕掛けてあげないといけないと思う。心掛けてはいますけど。

- (5) 校長の正の循環の背景には、地方の中学校と地域の若者の流出を含んだ諸問題が存在している。そのためには、将来、地域に根差して働く子どもたちに地元の中学校ができる教育をどのようにおこ

なっていくのかを模索していることが以下のコメントから窺い知れる。

校長：正の循環にして、地域、だから地域創生は、ほんまに地元に残る子どもをどういう風に育てるかが地域創生やし。地域が荒れんし、少年院とかそういうところに行く人をなくしていくためには、そういう風にね。地元ね。都会行かん、挫折したり失敗したりしてでも、もういっぺんチャンスがある。なんぼでも学べる場所を作るんが、これからの学校やと思うんで。（略）公立学校は、何が使命かを考えなあかん。公立は、地域の子どもたちをその底辺じゃなくてある一定以上の力にしてね、地域に返せるような教育をする。

- (6) 「中学校学習指導要領」（平成 29 年 3 月告示）の第 1 章「第 5 学校運営上の留意事項」によれば、「イ他の中学校や、幼稚園、認定こども園、保育所、小学校、高等学校、特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにすること」と掲げられている。また「交流及び共同学習ガイド」（文部科学省 HP）には、「子供たちに対しては、十分な事前学習を通じて、教職員が活動の意義やねらい等を明確に示すことが実際の活動において子供たちによる主体的な活動を促すことにつながります」と明示されている。
- (7) 「出席停止制度の運用の在り方について（通知）」（平 13.11.6 文部科学省初等中等教育局長通知）によれば、「出席停止の制度は、本人に対する懲戒という観点からではなく、学校の秩序を維持し、他の児童生徒の義務教育を受ける権利を保障するという観点から設けられた制度である。もとより、学校は児童生徒が安心して学ぶことができる場でなければならず、その生命及び心身の安全を確保することが学校及び教育委員会に課せられた基本的な責務である。こうした責務を果たしていくため、教育委員会においては、今回の法改正の趣旨を踏まえ、定められた要件に基づき、適正な手続を踏みつつ、出席停止制度を一層適切に運用することが必要である。また、出席停止制度の運用に当たっては、他の児童生徒の安全や教育を受ける権利を保障すると同時に、出席停止の期間において当該児童生徒に対する学習の支援など教育上必要な措置を講ずることが必要」とある。また事前指導として「（略）4.問題を抱え込むことなく、家庭や地域社会、さらには児童相談所や警察などの関係機関との連携を密にすること。生徒指導の方針や実情について説明責任を果たし、外部の意見を教育活動に適切に反映させること。実情に応じて、サポートチーム（個々の児童生徒の状況に応じ、問題行動の解決に向けて学校、教育委員会及び関係機関等が組織するチーム）など、地域ぐるみの支援体制を整備して指導に当たること。5.深刻な問題行動を起こす児童生徒については、前述の対応や個別の指導・説諭を行うほか、必要と認められる場合には、学校や児童生徒の実態に応じて十分に配慮しつつ、一定期間、校内において他の児童生徒と異なる場所で特別の指導計画を立てて指導すること。さらに、児童生徒に対する指導の過程において、家庭との連携を図り、保護者への適切な指導・助言・援助を行うこと」と明記されている。

この通達に即して A 中学校では、ケース会議等において他機関連携のもとで問題を起こした少年に対して支援している。下記の校長の意見からもわかるように問題を起こした少年に対して、どのような教育的支援が必要であるかを教職員や保護者、関係諸機関の専門家とともに考えて実行していることがわかる。

校長：発想の転換で、色んな地域の人に、僕が何を言うたかと言うたら、少年院や鑑別所に行かさへんために出席停止するんですよって。もう、みんな協力した。ほんなら現実に行かない。なんでか言うたら、その前に訓告出して、次に行ったら、委員会指導があって出席停止になるから、もう地域や親なんかは、一生懸命にこれをさせない。で、出席停止言うて家におるだけやのに、また悪いんですよ。だから親が苦勞する。親もちょっとは苦勞せなあかんけど、そこまで苦勞せんでもいい。だから学校とは別のところで、キ

チツとした矯正施設やないけど、この子に合ったようなプログラムで勉強さすんですよ。(略) 教育的配慮をちゃんとした上で、法律に従ってするのが普通でしょ。それからもうひとつは、開示をキチツとする。キチツと全部話す。いかん時は「いかん」と言うて、責任取る人が責任取ればそれでいいんじゃないかと。

- (8) ケース会議においても、校長自身の経験から現場中心の姿勢を窺い知ることができる。

校長：校長が入らんでよいんですよ。僕、もうケース会で上がってきても、法的なこととか、倫理的にあかんことは、その場で、ケース会の次の日かな。報告が来るんですよ。それで、これは OK、これは OK。これはダメ言うんはダメ言います。ダメ言わなかったら大事が起きますから (笑)。(略) カウンセラーも来とるんですかね、ワーカーも入ってますね。先生も入ってます。そういう人たちが、一生懸命になって作った分は、大抵、今現在考えられるなかでは一番ええんじゃないかなと思うんですよ。時代は変わつとるじゃないですか。だから、新しいものをどんどん入れて行くんが僕は大事だと思うんで。

- (9) ここで語っている内容は、5 年前の連携のきっかけとなる事例である。

調査者：その子はどういう理由で出席停止に。

法務教官：おそらくは、やっぱり問題行動を起こしたっていうのだと思います。

調査者：それは非行ですか。

法務教官：非行に近い、それは今の発達障害の子という感じじゃなく、いわゆる非行少年っていう感じだったですね。

調査者：受け答えは。

法務教官：受け答えは礼儀正しかったです。一応質問に答えてくれて、何したかとかも。細かいことは忘れちゃけど、ちょっと家庭的にも環境的にも恵まれてないっていうこととかもあって。なかなか、その難しかったっていうことがありましたかね。

- (10) 法務教官は、少年院の他に少年鑑別所の 52 施設 (分所含む) にも勤務している。しかし、少年鑑別所の観護とくらべて少年院の矯正教育は、少年の問題の改善を目指した指導が主となることから、少年院の勤務経験を有する法務教官は学校の連携に際してより処遇現場の知見を提供することができると思われる。

〔引用・参考文献〕

- ・都島梨紗, 2017, 「更生保護施設生活者のスティグマと『立ち直り』—スティグマ対処行動に関する語りに着目して—」『犯罪社会学研究』第 42 号, 155-170.
- ・仲野由佳理, 2017, 「少年院から社会への移行における更生保護施設の役割—更生保護施設職員の語りを見る『矯正教育における変容』のその後」『教育学雑誌』第 53 巻, p33-48.
- ・広田照幸・古賀正義・伊藤茂樹編, 2012, 『現代日本の少年院教育 質問調査を通して』名古屋大学出版会.
- ・文部科学省, 2019, 文部科学省ホームページ「交流及び共同学習ガイド」(2019 年 4 月 30 日取得, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/010/001/002/007.htm).

(さくた せいいちろう 現代社会学科)

2019 年 5 月 7 日受理

